



学校法人  
鎌倉女子大学

## 「さようなら」ということ

人生には、出会いもありますが、別れもまたつきものです。言うまでもなく、学校では、入学は、出会いの時、そして卒業は、別れの時。私たちは、人生のいろいろな場面で別れの言葉を口にします。

学校帰りの道すがら、友だちと手をふる毎日の別れ、住み慣れた土地を離れて、お世話になった近所の人に挨拶し、知らない土地に引っ越していく別れ、何かの理由で、恋人と離れていく切ない別れ、それこそ人生の終焉に際して、万感を込めて交わし合う今生の別れ、そんな別れの場面で、私たちは、口に出すにせよ、出さないにせよ、その人に「さようなら」という言葉を語りかけます。

別れには、寂しさの、また何がしか悲しさの、場合によると、ある種の悔恨の情というか、控えめにいえば、心残りの思いが伴うものです。それが、たとえ日常的な別れであったとしても。それだけにまた、「さようなら」という別れの言葉には、あえかな、いとおしい響きがたたえられることになるわけで、その響きは、たとえその言葉を知らない外国人の感受性にも伝わるもので、昔、ハリウッドでもマーロン・ブランド主演、助演ミヨシ・ウメキの「SAYONARA」という映画が作られたことがありました。

この「さようなら」という日本語に込められている日本人の特別の思いの意味するところを私に教えてくれたのは、この4月から本学の教授として着任して下さる東京大学教授の竹内整一さんです。竹内先生には、かつて卒業記念講演や生涯学習センターの講座を受けもってもらったことがありましたが、近年『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』（ちくま新書）というご本を出版されて、その中で、こういうことを書いておられました。

別れの言葉は、一つは「グッドバイ」（英語）や「アデュー」（仏語）のような「神のご加護を願うもの」、一つは「アウフ・ヴィーダーゼーン」（独語）や「再見」（中国語）のような「また会うことを願うもの」、一つは「アンニョンヒ・ゲセヨ」（朝鮮語）や「フェアウエル」（英語）のような「お元気でと願うもの」といった三つのタイプに大別されるわけだが、日本語の「さようなら」は、そのどのタイプにも入らない、「世界各国どこを探しても『さようなら』のような意味あいはきわめて珍しい」と、「さらば」でも、「じゃあね」でも同じ趣旨だが、元々「さようなら」とは、「左様ならば」と、先行きのことを受けて、後続のことが起こることを示す接続詞、つまりつなぎの言葉であり、それがやがて別れの言葉として自立的に使われるようになってきた、そして日本人は、11世紀以来、「さようなら」と互いに口にしながら、別れ合ってきたというのです。

そこで、竹内先生は、解説されます。「それは、別れに際して、『さようなら（ば）』と、いったん立ちどまり、何ごとかを確認することによって、次のことに進んで行こうとする

(逆に、そうした確認がないと次に進んで行きにくいという)、日本人独特な発想が「ひそんで<sup>\*\*\*</sup>いる」のだと。生涯学習センターの講座でも、こういう発言をしておられました。「日本人は、ある出来事から次の出来事に移る時、そこで一旦立ち止まってその場を総括するという傾向がある。そこを総括することが次のことに移っていく、新たな展開を可能にするというところがある<sup>\*\*\*</sup>」のだと。

つまり、日本人は、それまでの経験を振り返り、それを確認することによって、<sup>まき</sup>將に<sup>きた</sup>来らんとする新しい世界に臨もうと身構えるのだ、あるいは覚悟するのだということです。そして、これまで何とか無事に歩んで来たことを確認出来たわけだから、<sup>そうであるならば</sup>、その先もきっと同じように歩いていくことが出来るに違いない、だからきっと大丈夫だよ、「さようなら」という言葉の中には、そうした決然とした思いや祈りにも似た願いが込められているということです。

卒業する皆さんは、この鎌倉女子大学でどのような経験をなさったのでしょうか。それは、人それぞれによって違うことではしょうが、その経験がここでしっかりと出来たわけでしょう、そのことは卒業証書によってこうして証しされるわけでしょう、そしてその経験が一人ひとりの中にしっかりと刻みつけられているわけでしょう、<sup>そうであるならば</sup>、勇気をもって新しい世界に飛び出していくことが出来るし、この先人生にはいろいろなことが待ち受けているとしても、幾山河きっと立派に乗り越えていって下さるに違いない、そんな思いや願いを込めながら、私は、卒業に際して皆さんに、こう呼びかけることにいたします。

「さようなら、いざ生きめやも」。

※ 「さようなら考」『毎日新聞』（2009年3月31日）

※※ 「やまと言葉の倫理学」『信濃毎日新聞』（2009年4月18日）

※※※ 「シンポジウム」『鎌倉女子大学学術研究所報』（創刊号）

[>前のページへ戻る](#)